

第206回ぶらくり会講演要旨

柑芦会神戸支部 世話役 平林義康

- I. 開催日時：2025年3月22日（土）15：00～16：45
- II. 開催場所：神戸市立婦人会館4階「もくれん」
- III. 参加者（視聴者）：18名
 対面11名（神戸支部）
 オンライン7名（神戸支部2名、東海支部2名、香川支部・山口支部各1名）
- IV. 講演テーマ：素人が見た生成AIの真実
 ～ シニアこそAIを使おう！～
- V. 講師：北村 修一様（大学18期・柑芦会顧問）
- VI. 講演要旨：

1. AIと生成AI

- ① AI（Artificial Intelligence・人工知能）は1950年台のコンピューター黎明期に基礎研究が始まり、その後幾多の変遷を経て2016年頃にはAIが囲碁・将棋やポーカーで人間に勝利して話題を呼ぶことになります。
 そして2022年にはオープン（Open）AI社が対話型の生成AI「Chat GPT」を発表しました。利用者は2か月で1.2億人を突破、今では全世界の利用者は4億人超、日本人は600万人とされています。
 なお、AIは米国ダートマス大学のジョン・マッカーシー博士が1956年に命名されたものだそうです。
- ② 生成AIは様々な会社が有料あるいは無料のものを発表していますが、ここでは代表的なオープンAI社の「Chat GPT」をベースにその特徴、上手く使いこなすポイントを記します。
 - （1）特徴
 - ・確率計算でことばをつないで文章を作る／・ネット上の膨大なデータ（文章）から学んでいる／・ネット上に存在する誤った情報も学んでしまう／・不明なこともそれらしく返答してしまう／・質問に対して常に正しい回答をする訳ではないし、知性や感情を理解して回答している訳でもない。また、知らないとは答えないため、正確な知識を求めるツールには使えない。
 - （2）上手く使いこなすポイント
 - ・何を知りたいか「具体的」に伝える／・一度にたくさんのことを聞かずに段階的に「簡潔に」質問する／・ほしい回答のイメージを伝えるために「例」を挙げる／・回答の結果をどう使うか「用途」を伝える／・回答が期待と異なる場合、質問を「変える」、あるいは質問を「繰り返す」／・指示文に条件（回答の長さや形式）をつける／・人間に対するのと同じように「フレンドリー」に接する。

2. 生成AIの問題点

- ・利用価値の高い生成AIですが、様々な問題があるそうです。
 開発会社や各国では生成AIの悪用を防止する対策を講じているそうですが、我々利用者側でもそれらの課題を十分理解した上で活用したいものです。

(生成A I の課題)

- ・「偏見」、「誤情報」および「フェイク」を堂々と平気で伝えることがある。
➡「詐欺」に繋がる危険性もあるので、回答をそのまま鵜呑みにせず必ずチェックする。
- ・「著作権」や「倫理問題」に注意する。➡著作権、プライバシーに配慮し、倫理的な利用を心がける。
- ・「大量のデータ」と「計算リソース」が必要である。➡膨大かつ最新のデータと莫大な電力が必要。
- ・ハルシネーション（幻覚）を起こすことがある。
(例)「ダチョウは空を飛ぶ」と回答➡「鳥は空を飛ぶ」と「ダチョウは鳥である」から推論したと考えられる。

3. 生成A I との上手な付き合い方

- ・では生成A I によって何が変わるのか。また、生成A I との上手な付き合い方とは何か、講師に教えて頂きました。
(1) 何が変わるのか
 - ・例えば教育現場ではレポートの評価基準として「内容が上手くまとまっているか」ではなく「どれだけ独創的なテーマを設定できているか」と判断基準を変えることが出来る。
 - ・教員ある上司の役割として、「正しい知識の伝達はA I に任せ」➡「個々の理解度に合わせた指導、考える力の養成に注力する。」
 - ・弁護士の役割として「過去の判例を漏れなく探すことはA I に任せ」➡「担当事案の結論を推定する、あるいは妥協案を策定する」
- (2) 生成A I との上手な付き合い方
 - ・まずは使ってみる「習うより慣れろ」➡「可能性」の限界を知る。
 - ・「質問力・指示力」(プロンプト力)を磨く➡質の高い回答はプロンプトの質次第。質の高い質問力・指示力はアナログでも同じ。
 - ・「効果的に使いこなす」➡あくまでも「道具」なので使いこなせないともったいない。より「高度な仕事→自己実現」へつなげる。

4. A I 時代に問われるのは「問う力」

- ・斬新な質問、深掘り質問、正解のない質問等、自ら「質問」を設定する力を養うことが必要ですが、「質の高い知見や見識を持っているシニア層こそ活躍できる」と言われます。
- ・プログラミングはわからなくても、「質問力」があれば活躍の可能性はあるとのこと。

5. A I の活用によってシニアが受けているメリット

(1) A I 活用によるシニアのメリット

- ・家事支援 (A I お掃除ロボット) / ・防犯・見守り (A I 防犯カメラ、転倒検知等) / 手続き支援 (銀行業務、市役所、ケアマネ等との連絡、報告等) / ・話し相手 / ・趣味、学習 (歴史、料理、園芸等の趣味に関する情報収集等) / ・社会参加 (サークル活動、ボランティア活動の情報収集等)

(2) 地方自治体での活用事例

- ・香川県坂出市大越町で2023年11月より3か月間「買い物支援実証実験が行わ

れたそうです。具体的には次のような内容です。

☆高齢者がタブレット端末に話かけると日常生活に必要な商品を提案→ 注文内容が市内の食料品店に通知→ 食料品店がタクシー会社に配達を依頼→ タクシー会社が利用者の自宅に商品を配達

(3) AIを活用しているシニア

- ・かつてNHK TVにも出演したことがある若松正子さんは1935年生まれの89歳ですが、銀行を定年退職された後、趣味としてパソコンを始め、独学でプログラムを習得し、シニア向けアプリを開発されたそうです。

代表作は「hinadan」・・・雛人形を正しく並べるゲーム、と

「nanakusa」・・・春の七草を正しく答えるゲーム

アップルの開発者カンファレンス「WWDC」に招待されCEOのティム・クック氏とも対談されています。

現在は、全国各地での講演活動のほか、政府の「デジタル政策会議」のメンバーも務められています。

日常では、AIスピーカーを使って、レシピを確認しながら料理楽しんでおられるそうです。

以上

